

お帰りなさいませクソご主人様
(体験版用)

2013/4/25

Var. 1. 11

サークル名…ケチャップ味のマヨネーズ

「お帰りのなさいませクソご主人様」・登場人物紹介

■メイドの過去■

メイドという仕事をはじめの前までは、暗い目立たない女の子でした。感情的な表現(喜怒哀楽)を表に出すことが苦手で、あまり周りとかかわらないようにしていました。あるときメイド募集の広告を見て、メイドのアルバイトを始めましたが、もともと家事や料理が好きだったため、メイドの仕事はとても楽しく、仕事を1つ1つクリアしていくうちに自信が持てるようになりました。自信が持てたことで、以前のようなおどした態度は次第になくなりましたが、もともと感情が豊かになかったため、明るく振舞うことはできませんでした。

ただ、彼女は「メイドが感情を表に出さず凜として仕事をする姿」にあこがれがあり、自分が感情をあまり表に出さず、仕事をしている様子が、まさに自分の理想とするメイド像と考え、理想のメイド姿を演じている自分に、どこか心の中で酔っているような感覚さえありました。

そして、どんなに仕事が大変でも、弱気を見せたりせず、完璧にこなす立派なメイド姿を演じることが彼女自身のアイデンティティとなりました。

■メイドとご主人様の関係■

もともとはご主人様のもとで普通のメイドの仕事をしていました。

ご主人様と彼女の信頼関係ができたころ、ご主人様は自分に変態で、変態行為を見てほしいと打ち明けたため、彼女は性に関する経験が無いばかりか、そういった話題を口にする事すら苦手だったため、それを聞いたとき、喉の奥から熱いものがこみ上げ、思わず吐きそうになりました。

しかし、ここで断ったら彼女の価値、理想とするメイド像が壊れる——彼女のアイデンティティが崩壊し、昔の代めな女の子に戻ってしまうという恐怖を感じ、「仕事としてそれを受け入れる」選択をしました。

ご主人様の変態行為も初めのうちは上半身を見てほしいとか、見下したようにしてほしいというほんのささいな内容でしたが、そんなことさえ彼女にとっては未知の世界でもとても気持ち悪く、逃げ出したいと思っていました。それでも自分にプロだと言い聞かせ、耐えてきました。しかし、自分に危害が及ばない安心感と、暗い性格にコンプレックスを持っていた自分が上の立場になったという優越感から、彼女は次第にその境遇を好むようになりました。やがて彼女はご主人様を虐めることに悦びを感じ、その行為はエスカレートしました。

■メイドの性格分析■

メイド自身の性経験が乏しいため、男性に対して恐怖心を持っています。

特に、手を握ったり、直接男性の肌を触るような肌と肌が触れる行為に嫌悪感を持っています。

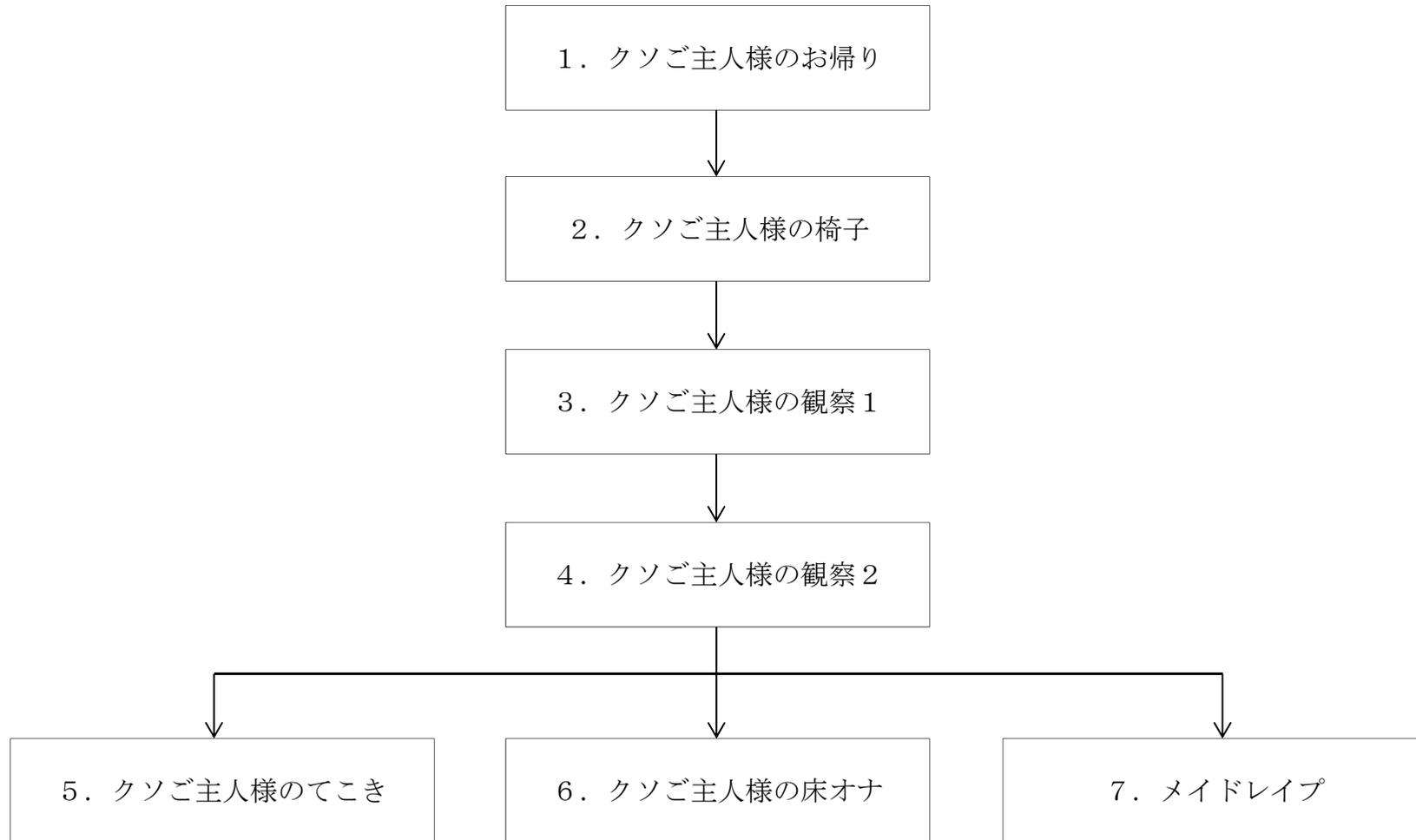
ただし、例えばメイド服を着ている状態で、よつんばになったご主人様に座るなどの間に服やスカートなどの障害物がある場合は、抵抗なくできます。

もともと臆病な性格なため、暴力的な行為は苦手で、ご主人様を虐めるときも「たたく」とか「拘束する」ようなことはあまり無く、主に言葉責めが中心です。

ちなみに、彼女はご主人様に対して恋愛感情は一切ありません。かといって嫌悪感もありません。

そもそも彼女は人とかかわり、ふれあい、つながりの経験が乏しいため

他人はあくまで自分の演じる世界の中のエキストラ程度としか考えていません。



注意…文中の「私」はすべて「わたし」と読んで下さい。
しゃべり方は全体的にあまり感情を出さずに事務的に淡々としてください。

「」

クソご主人様のお帰り

「お帰りなさいませクソご主人様」

「お疲れでしょう。さあお召（め）し物（もの）を着替えましょうか」

「・・・」

「着替える服がないですって？」

「はい、クソご主人様に着せる服はございません」

「クソご主人様は裸で十分でございます」

「さあ早く脱いで下さい、クソご主人様」

「・・・」

「はい、もちろん全部です」

「私の手間をとらせるおつもりですか？」

「ご自身で脱いで下さいませ」

「なぜ私が汚（きたな）らしいクソご主人様にさわらなくてはならないのですか」

「・・・」

「わかったらさっさと脱いでいただけますでしょうか？」

「何とろとろしているのでしょうか、

そんなこともすぐにできないのでしょうか、クソご主人様」

「15秒差し上げますから早くしていただけますでしょうか」

（15秒の間）

「・・・はい、脱げましたね」

「いったい脱ぐのにどれだけ時間がかかっているのでしょうかクソご主人様」

「私の貴重な時間がクソに奪われてとてももったいないです」

「これだからクソご主人様は面倒ですね」

「・・・」

「え？　なんででしょうか？　・・・喉が渴いた？」

「・・・」

「なぜクソご主人様の口からそのようなクソ生意気なクソをたれ
ているのでしょうか」

「私をこれ以上働かせる気なのでしょうか？ このクソご主人様は」
「・・・」

「わかりましたクソご主人様、お飲み物を用意いたします」
「・・・」

「・・・ぺっ！（メイドが床につばを吐く）」
「・・・」

「さあ、床の私の唾液（だえき）でもお飲みになってください」
「・・・」

「まったく汚らしいクソご主人様ですね」
「はいつくばって床をなめて・・・」

「・・・」
「おいしいですか？ クソご主人様」
「・・・」

「また床掃除しなくてはなりませんね」
「・・・」

「ほんとにどうしようもなく手間のかかるクソご主人様で大変です」
「・・・」

「まだ床をなめているんですか？」

「クソめんどくさいクソご主人様のご奉仕でとても疲れました」

「少々（しょうしょう）腰掛（こしか）けてもよろしいでしょうか。」

「・・・」

「ありがとうございます。クソご主人様」

「・・・」

「では、よつんばになって下さい」

「・・・」

「え？ なぜかって？」

「先ほど腰掛（こしか）けてもよろしいでしょうかといたたではないですか」

「性格だけでなく耳まで腐っているのですか、このクソご主人様は」

「本当にどうしようもないクソですね」

「・・・」

「ご理解されたら早くよつんばになられてはいかがでしょうか、

クソご主人様」

「・・・」

「はい・・・ありがとうございます」

「・・・」

「では・・・」

「・・・」

「ふう・・・（椅子に腰掛ける）」

「・・・」

「全然座り心地（ごちち）がよくないですね」

「・・・」

「クソでもひとつくらい役に立つことがあるかと思っただけですが」

「イスもまともにとまらないのでしょうか、このクソご主人様は」

「・・・」

「ごみですね」

「・・・」

「ああ、ゴミじゃなくて、クソでしたね」

「私としたことが失礼いたしました、クソご主人様」

「・・・」

「あまり動かないでいただけますでしょうか」

「動かれましたはリラックスできません」

「・・・」

「クソご主人様にこれほどまでにご奉仕しているのに」

「座ってリラックスすることすら、させていただくことができないなんて」

「本当にひどいクソご主人様ですね」

「・・・」

「また動いています」

「何度いったらわかりますか？ クソご主人様」

「学習することはできないのですか？ クソご主人様」

「・・・」

「本当に私の気分を害することしかできませんねクソご主人様」

「せめて、何か私を楽しませることをして頂けますでしょうか？

クソご主人様」

「・・・」

「どのように楽しませるか？」

「・・・」

「そんなこともわからないのですか？ この能なしクソご主人様は」

「一度小学校からやり直してみたいかがでしようかクソご主人様」

「その空っぽの頭を使ってよく考えてみてはいかがでしようかクソご主人様」

「ああ・・・空っぽではなくて、その頭にはクソが詰まっているんですね」

「だってクソご主人様ですから」

「クソなら仕方ありませんか・・・」

「・・・」

「では、私もこの居心地の悪いいすに座るのも疲れましたし」

「もう休憩は終わりに致します」

「・・・」

「私の貴重な休憩をクソご主人様のせいで台無しにされてしまいました」

「しばしの休憩時間を頂きありがとうございました。クソご主人様」

「では、何か楽しいことでもしたいと思いますので」

「こちらのベッドに仰向けになつて寝ていただけますでしょうか」

「・・・」

「なにを期待しているのでしょうか、このクソは」

「クソご主人様が考えているようなことはございませんのでご安心下さい」

「クソご主人様にさわるのも虫唾（むしず）がはしります」

「クソご主人様はクソのカタマリ程度の存在と言うことを

そろそろ自覚されてはいかがでしょうか？」

「・・・」

「では何をするかつて？」

「・・・」

「いちいちこのクソは質問してきてうざいですね」

「仕方がございませんので、そのクソの詰まった耳でよくお聞き

いただけますでしょうかクソご主人様」

「・・・」

「これほどまでに醜（みにく）いクソのような存在は見たことが

ございません」

「クソご主人様はそれほどまでに醜いのです」

「この世のものとは思えない醜い生き物が、

どうして生きていられるのか不思議でなりません」

「あまりにも不思議なので、その生態（せいだい）を調べてみたいと

思います」

「・・・」

「少々観察をしてもよろしいでしょうか？」

「・・・」

「ありがとうございます」

「それでは・・・そうですね・・・」

「・・・」

「クソご主人様のクソがでる場所はどうか拝見したいと思います」

「・・・」

「まずは、足を上げて両手で足を抱（かか）えていただけますでしょうか」

「・・・」

「何をとりとろしているのでしょうか？」

「早く上げていただけますでしょうか、クソご主人様」

「ほんとに愚図（ぐず）ですね、いいところ何もありませんね」

「・・・」

「ちゃんと、太ももを抱（かか）えて高く上げていただけますでしょうか」

「・・・」

「はい、まあいいでしょう」

「・・・」

「では拝見いたします」

「・・・」

「よくみえませんか、もっと高く上げていただけますでしょうか」

「いちいち言わないとやっていただけないのでしょいかクソご主人様」

「クソの詰まった頭では自分で考えることもできませんか？ クソご主人様」

「生きてて楽しいですか？」

「・・・」

「だいぶよく見えるようになりました」

「相変わらず汚いケツですね。クソご主人様」

「このアナからクソが出るのですね」

「クソがクソを出してたら世話ないですね」

「・・・」

「もっとよくこのアナを見たいのですがよろしいでしょうかクソご主人様」

「・・・」

「ありがとうございます」

「・・・」

「では、その両手でアナを大きく開いてみて下さい」

「・・・」

「クソご主人様らしい変態なポーズですね」

「恥ずかしくないのでしょうか・・・」

「もしかして興奮していらっしゃるのでしょいかクソご主人様」

「クソで変態とか、もう生きている価値ないですね」

「死んだ方がよいのではないのでしょうか」

「・・・」

「クソご主人様のクソのアナがひくついていますね」

「呼吸をしているようです」

「・・・」

「クソご主人様はむしろこちらが本体なのではないでしょうか」

「汚いアナですが、クソご主人様の醜い顔よりよほどましです」

「・・・」

「あら・・・アナの呼吸が速くなりました」

「見られて興奮しているのですか？ クソご主人様」

「性癖もクソですね」

「もつとよく見せてください」

「・・・」

「息とか吹きかけたらどうなるのでしょうか？」

「・・・」

「こんな汚い穴に息を吹きかけるなんておぞましくてとてもできませんが
(ある程度の間を開ける)

「ふっ！（息を吹きかける）」

「・・・」

「なにびくついているのでしょうか。このクソのカタマリは」

「一気にアナがしばみました」

「しわがぷくぷくしています」

「汚いですね」

「アナが大きくなったり小さくなったり、見ていて不気味です」

「この気持ち悪い動きは、醜いクソご主人様そのものですね」

「こんなにアナを大きく広げて、とてもまともな人間とは思えません」

「クソですね。クソ以下ですね」

「すぐにでも流してしまいたいですクソご主人様」

（ある程度の間を開ける）

「ふっ！（息を吹きかける）」

「・・・」

「いちいちそのびくつく動きが気持ち悪いですクソご主人様」

「ろくな人間ではございませんね」

「こんなクソご主人様は生きる価値なんてないですね」

「・・・」

「汚いクソの穴を見せつけられて不愉快です」

「ひどいクソご主人様ですね」

「クソご主人様、足を下ろしていただけますか」

「その両手をご自身の胸にそっと置いてその変態行為を反省してください」
「・・・」
「いわれたとおりにできないのでしょうか？」
「胸の上にそっと置いてくださいといっているのですよ？ クソご主人様」
「・・・」
「はい、それでけっこうです。ありがとうございます。クソご主人様」
「・・・」
「もう一度言いますが、醜いクソご主人様はご自身の変態行為をその手を胸にあてて反省してください」
「・・・」
「ちゃんと反省していますでしょうか？ クソご主人様」
「・・・」
「まさか、その手のひらの中にある突起（とつき）を意識してのようなことはございませんか？」
「クソご主人様のことですから、
また気味の悪いことを考えていないかととても心配です」
「吐き気がしますから変な気を起こさないようにお願いいたします」
「・・・」
「なんですか？ 少し手が動いてますよ」
「手が突起物にあたってますよ？ クソご主人様」
「まさか反省もせずに変態なことを考えていないでしょうか？
クソご主人様」
「そこまで人間が落ちましたか？ クソご主人様」
「私が見ているのですよ？ 恥ずかしいとは思いませんか？ クソご主人様」
「少しも手を動かしてはいけませんクソご主人様」
「・・・」
「クソご主人様の狂った姿なんて気味が悪すぎますので
変な行動は起こさないようお願いいたします」
「ましてや、私が0（ぜろ）までカウントしたときに」
「意識が飛んだように突起物を指でむさぼるような行為なんてされたら」
「私、吐いてしまうかもしれません」

「きつと私が『やめてくださいクソご主人様』というまで
狂い続けるのでしょうか・・・」

「・・・」
「きもちわるいですクソご主人様」

「・・・」

「5(に)」

「・・・」

「虫唾(むしず)が走りますクソご主人様」

「・・・」

「4(よん)」

「・・・」

「なぜクソご主人様は生きているのでしょうか」

「・・・」

「3(さん)」

「・・・」

「クソご主人様は虫けらほどの価値もないですね」

「・・・」

「2(に)」

「・・・」

「変態クソご主人様」

「・・・」

「1(いち)」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「0(ゼロ)」

「・・・」

「・・・」

「ああ、気味が悪い・・・」

「なんなのでしようこの生き物」

「変態・・・蛆虫(うじむし)・・・ギョウ虫・・・」

「口からよだれをたらして、

自分で自分の乳首をむさぼる姿を見られて喜んでいるとか

「どういう神経したらそんなことができるのでしょうか」

「とても見ていられません」

「さすがクソご主人様です。予想以上に最低な人間・・・」

「いえ、最低なクソですね」

「・・・」

「・・・」

「いつまで続けるのでしょうかクソご主人様は・・・」

「これだから頭にクソが詰まっている生き物は気味が悪いですね」

「早く死んでいただいたほうが幸せだと思います」

「ああ・・・見ていてほんと吐き気がします。クソご主人様」

「ああ・・・いつまでやるおつもりでしょうか・・・クソご主人様」

「ああ・・・いい加減にしたらどうでしょうかクソご主人様」

「ああ・・・吐き気も限界です、もう気味が悪くて気味が悪くて・・・」

「ああ、もう——『やめて！』」

(ここで初めて感情的な発言。「ああ、」で多少怒った感情。

「もう——」で間を置いて、力強く「やめて」と叫ぶ)

「・・・」

「・・・」

「・・・」

(声のトーンはまた戻る)

「とても汚らしいものを見せられました」

「大変不愉快です」

「本当にこのクソご主人様は変態ですね」

「これ以上の変態行為なんて考えられません・・・」

「・・・」

「クソご主人様、どうされましたか・・・」

なにか満足されていない様子ですね」

「こんな変態行為を続けておいてさらにもっと変態行為を見せ付ける気でしょうか？」

「どうせクソのような内容とは思いますが」

「・・・」

「クソご主人様の一番の変態行為とは何でしょうか？」

5. クソご主人のていき

※製品版をお求め下さい

6. クソご主人の床オナ

※製品版をお求め下さい

7. メイドレイプ

(ガバツ) (ベッドに押し倒す効果音)

「あっ——」

「・・・」

「クソご主人様、痛いです。私を押し倒すとか正気ですか？」

「根性までクソになりましたか？」

「・・・」

「今ならまだ許して差し上げますクソご主人様」

「その汚い手をどかしていただけますでしょうか、クソご主人様」

「・・・」

「せいぜいオナニーする程度のクソの価値しかないクソご主人様では
女性を気持ちよくさせることなんてできません」

「私の上に乗っているクソが重いです」

「この重いクソをどかしていただけますでしょうかクソご主人様」

「・・・」

※続きは製品版で